

されています。検査を受ける患者さんにも、とても分かりやすいと思います。

3 「癌治療センター」機能

癌に対する抗癌剤治療を専門的に行う

「臨床腫瘍医」を擁する「化学療法科」

癌に対する抗癌剤治療を「化学療法」と言い、化学療法を専門的に行う内科医を「臨床腫瘍医」あるいは「腫瘍内科医」と言いますが、日本にはまだこうした抗癌剤治療の専門家がほとんどいません。

当院ではすでに昨年、「臨床腫瘍医」が常勤医として赴任し、「化学療法科」を新しく作っています。

癌治療に当たっては、我々医療サイドからの一方的な押し付けではなく、患者さんやご家族にも治療法決定に積極的に参加してもらい、その要望に耳を傾け、臨床腫瘍医、外科医、放射線治療医等がよく相談して、個々の患者さんにとって最適な治療は何かを、「癌に対する“チーム医療”」として決めていくようなシステムにしたいと思います。

快適な環境で外来通院化学療法を受けられる

「外来化学療法室」

化学療法は、長期間繰り返さなければいけない治療ですので、入院が必要な治療法より外来通院で可能な治療法の方が望ましいと考えられ、通院治療が可能な薬剤や投与方法が次々と開発されています。

しかし、化学療法には、多少の差はあるものの「副作用」もあ

ります。外来通院という形で治療

を継続するためには、

治療の場に可能な限りの「快適さ」

が必要です。そうしたことから、3ページでもご紹介しました外来点滴室2室のうち1室を、外来通院化学療法を受ける患者さんのための「外来化学療法室」にしています。リクライニングシートや液晶テレビのほか、すぐ近くには洗面所も用意され、可能な限り快適な環境で外来通院化学療法が受けられます。

日本でも最高スペックを誇る放射線治療施設

1階の放射線部門の一角に独立して放射線治療施設を作りました(図4)。

放射線治療には、病巣以外の正常組織も必ず放射線に被曝するという、放射線の物理学的特性からくる制限があります。したがって、正常組織に与える毒性を可能な限り回避するため、癌組織を完全に死滅させるだけの十分量の放射線を標的組織に当てることができないというジレンマがあります。放射線は必ず狙った病巣より浅いところで一度正常組織を通過しますし、また、狙った癌組織に隣接する正常組織にも放射線は当たってしまうからです。

こうした正常組織への影響を可能な限り低減し、同時に、ターゲットとしている癌組織に十分量の放射線が当てられるような照射方法や照射機

